

## 検証結果報告書（研究業績水準判定に係る記載抜粋）

【平成16～19年度の評価】検証結果報告書（平成21年12月）

### 第三章 学部・研究科等の現況分析の検証

#### 2. 研究活動の現況分析

#### 2.4 研究業績説明書と水準判定

##### （1）研究業績説明書の作成

（P94～97）

（略）

法人からの自由記述回答では数多くのコメントが寄せられた。多くは「SS」「S」の基準が不明瞭であり、より明確な基準や、具体的な例示を求める意見であった。特に、法人内部で業績を選定する際に、学部や分野により基準が異なり、学内でその調整を行うために多くの時間が割かれたと指摘されている。また、教育学や工学、及び学際学部等の多様な分野を含む学部・研究科等では部局内においても何が優れた研究であるかを判断することが困難であったと指摘されている。

全分野に共通的な基準を具体的に設定することは不可能であるが、法人からの自由記述回答においては、「当学部で検討・採用した、優れた論文の選抜方法については、全国的に共用できるものが多く、評価方法に関して全国統一の、より具体的方法の検討があつて然るべき」と指摘されるなど、今回の法人での経験や、実際に提出され判定された研究業績説明書を整理することで、ある程度の分野わけのもとで基準の具体例を検討することは可能となろう。ただし、今回の自由記述回答でも、分野の多様性の点から一律に「SS」「S」の基準を指定せずに法人に委ねたことは適切であったという意見もあり、標準化を押し進めない注意が求められる。

（略）

また、「SS」「S」の判定結果の開示をすべきという意見がみられる。今回の評価においては、研究業績の水準判定は飽くまでも分析項目「研究成果の状況」のための根拠資料・データの一つとして開示を行わなかった。しかし、透明性の観点から、判定結果ごとに研究業績の数を評価報告書に記載すべきという意見や、研究活動の改善のためにも個々の業績を法人向けには非公開で回答すべき、などの意見がみられる。

（略）

## 【評価結果の確定】検証結果報告書（平成24年1月）

### 第2節 評価結果の確定についての検証

#### 第2項 学部・研究科等の現況分析について

##### 2.2 研究業績水準判定の方法について

（P19～22）

（略）

理由の「その他」を選んだ場合の自由記述 22 法人から得られている。根拠資料に基づいて研究業績水準判定を行う方法自体に対する懸念が示されており（6 法人）、学問分野によって根拠資料を示しにくいことや、2 年間では根拠が出にくい場合があることが指摘されている。また、選択肢にもあったように、「SS」とする基準が不明であることの指摘も再度なされている（5 法人）。さらに、研究業績水準判定の結果が、現況分析結果にどのように反映されたのか、そのプロセスが不明であるという意見もみられる（4 法人）。一方、研究業績説明書を一業績一枚の様式から、より簡素な様式へと変更したことが、作業負担軽減へとつながったという意見もある。

（略）